

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：21402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592502

研究課題名（和文） 助産師の臨床能力向上のために分娩介助技術に OSCE を用いた
評価の有効性の検討研究課題名（英文） Effectiveness of assessment using Objective Structured
Clinical Examination regarding delivery assistance skills for
improving the clinical ability of midwives

研究代表者

二村 良子 (NIMURA RYOKO)

公立大学法人 三重県立看護大学 看護学部看護学科・准教授

研究者番号：30249354

研究成果の概要（和文）：妊娠から産褥、新生児期に関する 4 つの OSCE 課題を作成し、様々な臨床経験の助産師に実施し、その評価の有効性について検討を行った。録画した実施内容、終了後のインタビュー内容の分析から、OSCE は臨床経験の違いがあっても、助産師の技術修得を評価するのに有効であった。臨床経験により違いがみられたアセスメント過程の可視化や今後の予測、対象者の行動レベルを明確にするなどを評価の視点に設定していく工夫の必要が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We created four Objective Structured Clinical Examination(OSCE) related to the stages from pregnancy to the postpartum and neonatal periods, implemented them on midwives with varying degrees of clinical experience, and investigated their effectiveness. Based both on analysis of recorded contents and on the contents of interviews conducted after the OSCE, the OSCE were found to be effective for assessing skill acquisition among midwives, regardless of difference in clinical experience. These findings suggest the need both to clarify the assessment process for which differences were observed by clinical experience, and to make modifications in order to set issues such as future predictions and clarification of the activity levels of subjects as assessment perspectives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：助産師・OSCE（客観的臨床能力試験）・臨床能力・分娩介助技術

1. 研究開始当初の背景

看護において、看護実践能力の低下が指摘され、文部科学省の「看護教育の在り方に関

する検討会報告」¹⁾において、卒業時の看護実践能力の到達目標の設定が行われている。看護においては、長い看護教育の歴史の中で、

独自のさまざまな看護教育技術演習方法^{2,3)}、技術試験⁴⁾などが取り入れられ、実施されていた。しかし、看護師等の教育システムがさまざまな状況である現在において、看護教育技術演習方法、技術試験については各教育施設が独自に行っていることが多く、技術試験等においては、共通な評価とはなっていない。

卒業時の看護実践能力について説明責任の遂行が求められている今、医学教育において行われている客観的臨床能力試験(OSCE: Objective Structured Clinical Examination 以下OSCEと記す)の考えを取り入れ、共通な試験の導入など看護独自の実践能力向上を図るシステムの構築が必要である。また、産科医師の減少に伴い、分娩を実施する施設は平成8年には3,991、平成17年2,933⁵⁾、平成23年には2,378となり年々減少している⁶⁾。近年の医療安全の確保に向け、特に、周産期領域の医療提供において、母子の安全確保に向けた対策が求められ、このような状況を受け、安心・安全な出産の場所を確保するため、産科医療の集約化及びネットワーク化が急速に進められている。厚生労働省では、平成20年より「院内助産所・助産師外来施設整備事業」が実施され、院内助産所・助産師外来の開設のための施設整備や助産師等研修事業への補助や新人助産師臨床能力向上推進事業にも取り組んでいる。今後、助産師としての役割を十分発揮できるよう、また、安心・安全な出産ために新生児の蘇生技術等も含めた、分娩介助技術等関連技術の修得が重要となってくる。しかし、助産師養成課程において、10例程度の分娩介助技術修得では、学生の自己評価が低い場合、卒業後の助産業務遂行に危惧を抱かせるものであったとの報告もある⁷⁾。

さまざまな看護行為には、その看護技術実施時に施行プロセスとしてのアセスメント能力が求められる。「分娩期のケアの実践能力」は、助産師の専門職としての自律性に影響を及ぼす要素の1つと考えられる⁸⁾といわれている。また、助産学生の分娩介助実習における助産実践能力習得について、学生は段階的に「分娩介助に必要な能力」と「助産師として求められる能力」を習得していたが、「判断」に比べ、「予測」「援助」の順で習得状況が低くなっていた⁹⁾。助産外来における助産師の実践能力評価基準についてOSCEでの取り組みも試みられてきている¹⁰⁾。

助産教育課程の学生へのOSCE導入や卒業前の学生へのOSCEを用いた実技評価等が行われている^{11,12)}が、卒業後とその後の臨床経験における助産師の技術修得状況についてOSCEを用いて行われているものはみられない。

そこで、本研究では、卒業前の学生だけではなく、臨床経験の異なる助産師に対して、

OSCEを実施し、助産技術修得等を把握する評価としてOSCEの有効性およびその課題について検討するものである。

2. 研究の目的

本研究は、助産師の臨床能力向上のため、分娩介助技術および分娩に関連する看護についてOSCEを用いた評価を行い、また、さまざまな臨床経験の助産師に実施し、分娩介助に関連する技術の修得過程を明らかにし、OSCE実施の有効性について検討するものである。

本研究は3年間で行うものであるため、各年度における研究の目的を以下に示す。

<平成22年度>

助産教育課程において学習する看護技術項目の中で、特に、分娩介助技術および新生児蘇生法に関する技術に着目し、OSCEにより評価を行うにあたり課題の設定、評価表およびマニュアルを作成することである。

<平成23～24年度>

平成22年度で作成したOSCEに関する課題およびチェックリストを用いて、卒業前の学生だけではなく、臨床経験の異なる助産師に対して、OSCEを実施し、助産技術修得等を把握する評価としてOSCEの有効性およびその課題について検討することである。

3. 研究の方法

<平成22年度: OSCEの課題等の作成>

OSCEの実施に際して、妊娠、分娩、産褥、新生児期に関する助産師の実践能力に必要な内容を精選し、4課題を研究者で協議し、作成した。

課題作成にあたっては、「看護教育の内容と方法に関する検討会第一次報告(厚生労働省平成22年11月)の助産師に求められる看護実践能力と卒業時の到達目標と到達度(案)「表5」に示されている実践能力、卒業時の到達目標、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業到達目標—教育内容と学習成果—」の看護実践能力の群「I群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力」、「II群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」、「III群 特定の健康課題に対応する実践能力」の視点に基づき含まれる実践能力を研究者で検討し、妊娠、分娩、産褥、新生児期に関する助産師の実践能力に必要な内容を精選した。臨地実習や臨床の場面を遭遇する機会が多いと考えられる場面を選択し、各時期の事例に基づき4つの課題を研究者で協議し、作成した。また、それぞれの課題に対して、チェックリストおよびマニュアルを作成した。

課題内容、チェックリスト、マニュアルに

については、事前に臨床経験 5 年前後の助産師に実施してもらい、課題実施における問題点や評価方法の妥当性などの検討・修正を行っている。

<平成 23～24 年度：OSCE の実施および分析>

(1) 研究参加者：

①臨床経験 10 年以上の助産師（以下熟達助産師と記す）2 名

②臨床経験 2 年未満助産師^{注1}（以下新人助産師と記す）3 名

③本学助産課程修了者（以下初心者と記す）4 名

注1：新人助産師は、入職後の配属先やローテーション研修等によりマタニティケアの実践が 1 年未満では困難である現状を鑑み 2 年未満とした。

(2) 実施方法

①OSCE 実施

熟達助産師、新人助産師、初心者に対して、妊娠、分娩、産褥、新生児期に関する OSCE の課題を読み、課題に必要な看護技術等をそれぞれ 10 分間実施した。課題実施の場面について、ビデオカメラ 1 台を用いて録画した。それぞれの課題の実施終了後、5 分間のフィードバックを研究参加者と研究者で行った。同時に研究参加者には OSCE 実施に関する意見を求めた。

②グループインタビュー

すべての課題が終了した後、研究参加者自身が OSCE を実施している場面の録画内容を視聴した。その後、インタビューガイドに基づき、臨床経験が同じである研究参加者に対してグループインタビューを行い、インタビュー内容を IC レコーダーに録音した。

これら OSCE を実施し、撮影した録画内容 (①) およびグループインタビュー内容 (②) を分析対象とした。

(3) 分析方法

①OSCE 実施

録画した内容については、研究者 2 名のみが視聴し、熟達助産師、新人助産師、初心者の違いによる実施内容を、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標－教育内容と学習成果－」の看護実践能力の群「Ⅰ群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力」、「Ⅱ群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」、「Ⅲ群 特定の健康課題に対応する実践能力」の視点に基づき、実施した内容の特徴を抽出し、抽出された内容の集約を行った。

②グループインタビュー

熟達助産師、新人助産師、初心者それぞれ

へのインタビュー内容を逐語録に起こし、OSCE 実施による研究参加者自身の看護実践への気づき、臨床能力向上に関与すると思われる要因を明らかにした。さらに、熟達助産師、新人助産師、初心者において課題による看護実践能力のとらえ方の違いや、OSCE 実施がそれらを評価するのに十分であるかなどについて語られた部分を抽出し、抽出された内容についてカテゴリー化を行った。

上記の①OSCE の実施および、②グループインタビュー内容から、OSCE 実施を通して熟達助産師、新人助産師、初心者の三者の違いについて明らかにした。さらに、助産師の臨床能力の向上のために、助産師の分娩介助技術等に OSCE を用いた評価が有効であるかについての検討を行った。

<倫理的配慮>

助産師関連の研修等に参加している助産師に対して研究依頼文を送付し、研究参加への意思を表明した助産師に対して改めて、口頭と文書にて説明し、同意が得られた助産師より署名を得た。同意後も、最終的な研究参加の意思確認については OSCE 実施の日に確認した。文書には研究の目的、方法について記載し、研究への参加は自由意思であること、いつでも辞退できること、OSCE 実施の録画内容および IC レコーダーに録音した会話内容などについては秘密を厳守すること、録画・録音内容は研究者 2 名のみが視聴すること、それらのデータについては管理を厳重に行い、データは個人が特定されないように配慮すること、本研究の目的以外には使用しないことを記載し、研究の過程においてこれを遵守した。なお、本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て行っている（通知書番号 113001）。

4. 研究成果

<平成 22 年度>

「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業到達目標－教育内容と学習成果－」の看護実践能力の群「Ⅰ群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力」、「Ⅱ群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」、「Ⅲ群 特定の健康課題に対応する実践能力」の視点に基づき含まれる能力を研究者で検討し、実施内容の課題、チェックリスト等を作成し、事前に臨床経験 5 年前後の助産師に実施してもらい、課題実施における問題点や評価方法の妥当性などの検討・修正を行った。

課題の場面設定については、できるだけ実際の場面に即した設定とすることや必要な情報を収集できるようにカルテの準備を行った。看護技術実施にあたって必要な物品については、課題の状況に合わせて研究参加者

が選択して、使用できるように物品場所を別に設けておくことが必要であるなどの意見を受けて、課題場面の設定について工夫を行うようにした。

課題場面の設定には限られた環境の中で、臨床の場面により近づける工夫が必要である。しかし、実際の場面で行われているような情報収集ができるように設定の工夫が必要であり、また、得られた情報から、どのように対象者の状態を把握していくかということを考えていくことが重要である。OSCEの課題場面において何を実施するのかという目的を明確にしておくことが重要であり、その課題の目的にしたがい、妊産褥婦、新生児に関する情報をどの程度提示するかということが決まってくるものと考えられる。

<平成 23～24 年度>

(1) OSCE 実施に関する録画内容の分析

上記で作成した課題について、熟達助産師、新人助産師、初心者に対して OSCE を実施し、その内容を録画し、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標—教育内容と学習成果—」の看護実践能力の群「Ⅰ群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力」、「Ⅱ群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力」、「Ⅲ群 特定の健康課題に対応する実践能力」の視点に基づき録画した内容の分析を行った。

①ヒューマンケアの基本に関する実践能力

『ヒューマンケアの基本に関する実践能力』は課題に対する目的や方法の説明、妊産褥婦に対する声かけなどの配慮について評価するものである。

熟達助産師、新人助産師、初心者は、それぞれの課題場面で対象者に声かけを行っていたが、熟達助産師は実施した内容についてフィードバックを行い、対象者からの話を得て、さらに次の声かけを行うというように対象者との【相互交流により広がる会話】となり、会話量が多くなっていた。初心者については、分娩期や産褥期の産婦・褥婦に対して看護を実施する際には、分娩に対するねぎらいの声かけを行っており、【妊産褥婦へのねぎらいの声かけの実施】が特徴であった。分娩に対するねぎらいの声かけは初心者から行っていたが、その他の情報収集を初心者から対象者に行っているというより、対象者からの問いかけに対して応えているという、【対象者からの問いかけへの応答】にとどまっていた。そのため、会話量が少なく、会話の内容も広がりが見られず、【乏しい会話の発展性】という特徴がみられていた。

②根拠に基づき看護を計画的に実践する能力

『根拠に基づき看護を計画的に実践する能力』は、必要な情報収集、アセスメント・実施に関する評価である。

初心者は、実施内容について説明を行っていたが、実施に至るアセスメントが不十分なため、【対象者に伝わりにくい実施の意図】の特徴がみられていた。

熟達助産師は、ふだんの状況と異なるような場面設定であっても、【ふだんと異なる場面でも可能な観察や会話】を行っており、【瞬時に行えるアセスメント】や、【意識的に伝えるアセスメント過程および今後の予測】という特徴がみられていた。

③特定の健康課題に対する実践能力

『特定の健康課題に対する実践能力』については、個々の課題に対する技術修得状況および観察や実施した内容に基づく健康状態についての説明や必要と考える援助に関する説明について評価する項目である。

初心者は、【対象者の訴えにより喚起される行動】の傾向がみられるため、予測されたことではない内容について考えながら行動しているため、【予測していない内容に対する行動への躊躇】がみられた。そのため、次の行動に移るまでに間があるという特徴がみられていた。

新人助産師は、【実施内容についての説明】や【今後の予測に対する説明】はあるものの、どうしてそのようなことが起こるのかを伝え、その判断に対する根拠に基づいた説明を行っていないので、【伝わりにくいアセスメントの過程】があり、対象者にとって行動の根拠が明確になりにくい特徴がみられていた。

熟達助産師は、【行動しながらも予測に対する根拠に基づく説明の実施】を行っていた。今後の状態の変化等の予測やどのように過ごすか、対象者が実施すべき行動について、【対象者に対する行動レベルを明確にした伝え方】を行っていた。また、アセスメントに至った過程についての説明を十分に行うなど【アセスメントの過程の可視化】を積極的に行うという特徴がみられていた。

これらのことより、初心者は課題に基づき看護を実践するにあたり、「判断」を十分に行えているかわからないとし、自分自身の判断に対する自信のなさが伺えた。新人助産師については、判断は行っているが、熟達助産師でみられた「今後の予測」や「援助」について十分実施できていない現状が明らかとなった。しかし、全体的に、OSCE 実施の限られた時間内における助産師の「判断」「今後の予測」「援助」については、今回作成したチェックリストなどの評価項目では十分に評価が行えていない現状があった。今回のように録画内容により OSCE 場面を再現し、客

観的に評価するような機会を設けることも有効であると考えられる。

(2) インタビュー内容の分析

初心者は、提示された課題場面や準備されている物品等をみることにより、OSCEの課題で求められているケアの推測を行っており、そのような状況に対して、実際に自分の判断で行っているのではないという自覚があるため、「自分の行っていることとに対して、自信がない」や「本当にこれでよいのか自信がない」という【自身の判断に対する低い信頼性】という特徴を示していた。

新人助産師は、「病院の実施はマニュアルにより決められているのでそれにしがたがった」、「破水後には抗生剤を投与する」、「陣痛測定時にはバイタルサイン測定を行う」などのように、ふだん臨床において実施している内容に基づき、課題についても実施しており、【マニュアル通りにできていたケア】となっていた。そのため、ふだんとは異なる場面の課題実施となった場合、「ふだん行っていて、できていたと思っていたことが、課題実施ではできなかった」、「状況が少しかわるとどのように実施したらよいかわからなくなる」など、【判断の曖昧さの露呈】となっていた。そのことより、「自分の看護を振り返る良い機会となった」、「課題実施を通して、自身の課題がわかった」など、【自身の看護の課題の実感】の機会となっていた。

熟達助産師は、対象者がどのような服装や表情をしているか、会話における声の大きさ、息遣いなどから、【五感に基づき瞬時の判断】を行うことを大事にしていた。また、OSCE実施の場面設定については、ふだん臨床で使用している物品と異なっていたり、臨床で実施している状況とは異なっていることに対して、今回のOSCE実施の際に【ふだんとは異なる状況への戸惑い】を感じていた。しかし、目の前の対象である妊産婦に対して、熟達助産師は、「ふだんは行うことはないが、この状況において必要なことを実施した」というように、【状況に合わせた対応】を行っていた。

初心者は、課題場面より必要なケアの推測を行い、【自身の判断への信頼性の低さ】の特徴があった。

妊娠、分娩、産褥、新生児期の課題については、熟達助産師、新人助産師、初心者ともに分娩、産褥期に関しては、臨地実習や臨床における助産師業務の中で日常的に実施している項目となっているので、OSCE実施に際してもスムーズに実施できていた。しかし、熟達助産師、新人助産師、初心者ともに妊娠期や新生児期のOSCEの実施については、【実施に対する戸惑い】【実施における自信のなさ】がみられていて、【自身のOSCE実施にお

ける課題の実感】があった。OSCEの実施を通して、自分自身の経過診断技術、診察技術、コミュニケーション技術における課題について振り返る良い機会となっていた。

<今後の展望>

「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業到達目標－教育内容と学習成果－」などを参考にしながら、OSCEに関する課題を作成し、実際に臨床で働く、熟達助産師、新人助産師、初心者にOSCEの実施を行い、臨床経験の違いがあっても助産技術修得状況の評価にOSCEを用いることは有効であるかどうかの検討を行った。助産技術修得状況の評価において、臨床経験の違いがあっても、同じ項目のOSCEで評価することは可能であることがわかった。しかし、同じOSCE課題場面であっても、臨床経験の違いにより、実施の中で、研究参加者は「判断」「今後の予測」「援助」の段階の違いを示すことがわかった。したがって、同じ事例を用いながらも、OSCEの課題に対して、臨床経験に応じて評価の視点を設定し、助産技術修得状況の把握を行うことでOSCEの活用が有効であることがわかった。

臨床経験の違いがあっても、助産技術に関しては、新人助産師と熟達助産師の違いとしてみられたアセスメントの過程の可視化や今後の予測、対象者の行動レベルを含めた実践に関する行動についてを、評価に反映させていく必要がある。

熟達助産師、新人助産師、初心者に対してOSCEを実施し、その特徴を抽出していく中で、臨床経験の違いにより明らかとなったのは、経過診断能力、診察技術、コミュニケーション技術、さらに健康生活診断能力とそれに合わせた保健指導能力などであった。

今回使用したOSCE課題のチェックリストでは、これら能力、技術に関する内容をすべて反映したものではないが、OSCE実施により、臨床経験の違いからそれらの能力が関連していることがわかった。したがって、チェックリストへの反映をどのようにしていくかなど、OSCEでの評価の限界を踏まえた上で、実践能力の評価方法の更なる検討が必要である。

また、今回の成果を通して、課題に基づくOSCEの評価では、臨床経験による実践能力の段階など、録画内容を用いて自分自身で客観的に評価できる方法の導入の検討も必要ではないかと考える。今後は、シミュレーション教育において実施されているデブリーフィングの導入などを視野に入れて、今後取り組んでいくことが必要ではないかと考える。

《参考文献》

1) 看護教育の在り方に関する検討会：看護

実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標、2004

2) 藤内美保、他：看護基本技術能力向上のための技術チェックプログラム実施 大分県立看護科学大学の取り組み、看護教育、46(4)、8-12、2005

3) 小泉仁子、他：看護実践能力育成の充実に向けた電子媒体による技術チェックリストの検討 東京医科歯科大学の取り組み、過誤教育、46(4)、13-22、2005

4) 内藤直子、他：プレテスト・ポストテスト時の母性看護実践能力評価の評価基準表と学生の変容、香川大学看護学雑誌、9 (1)、1-6、2005

5) 厚生労働省：平成 17 年度医療施設（静態・動態）調査・病院報告の現況、2005

6) 厚生労働省：平成 23 年度医療施設（静態・動態）調査・病院報告の現況、2011

7) 田島朝信、他：助産学生の分娩介助技術習得度についての考察－助産師の学生時代と現在における分娩介助技術自己評価の比較検討に基づいて－、熊本大学医学部保健学科紀要、3、55-66、2007

8) 山崎由美子：病院や診療所に勤務する助産師の専門職としての自律性－分娩期の実践能力および医療過誤に対する姿勢との関連－、母性衛生、50 (1)、102-109、2009

9) 大滝千文、遠藤俊子、他：助産学実習における助産実践能力の習得に関する研究、母性衛生、52 (2)、337-348、2012

10) 松永佳子、山崎圭子、他：助産外来における助産師の実践能力評価基準の開発－客観臨床能力試験 OSCE を活用して－、東邦看護学会誌、9、9-16、2012

11) 伊藤美栄、他：卒業時における分娩期の助産診断・分娩介助技術能力の評価と課題－卒業前の学内演習において OSCE を実施して－、日本助産学会誌、22 (3)、416、209

12) 正岡経子、他：経験 10 年以上の助産師の産婦ケアにおける経験と重要な着目情報の関連、日本助産学会誌、23 (1)、16-25、2009

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

① 二村良子、崎山貴代、永見桂子：臨床経験の違いによる OSCE (客観的臨床能力試験) の有効性の検討、第 33 回日本看護科学学会学術集会、2013.12. (予定)

② 二村良子、崎山貴代、和智志げみ、田中利枝、岩田朋美、永見桂子：臨床経験による助産技術修得における OSCE (客観的臨床能力試験) を用いた評価の検討、第 54 回日本母性衛

生学会学術集会、2013.10. (予定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

二村 良子 (NIMURA RYOKO)

三重県立看護大学・看護学部・看護学科・准教授

研究者番号：30249354

(2) 研究分担者

永見 桂子 (NAGAMI KEIKO)

三重県立看護大学・看護学部・看護学科・教授

研究者番号：10218026

崎山 貴代 (SAKIYAMA TAKAYO)

前三重県立看護大学・看護学部・看護学科・講師 (H23→H24：連携研究者)

研究者番号：40321278

(3) 連携研究者

村本 淳子 (MURAMOTO JUNKO)

三重県立看護大学・看護学部・看護学科・学長 H22→H23

研究者番号：50239547

和智志げみ (WACHI SHIGEMI)

三重県立看護大学・看護学部・看護学科・講師 H22→H24

研究者番号：70410173

中山 優子 (NAKAYAMA YUKO)

元三重県立看護大学・看護学部・看護学科・助教 H22

研究者番号：20433229

田中 利枝 (TANAKA RIE)

前三重県立看護大学・看護学部・看護学科・助教 H22→H24

研究者番号：90515793

岩田 朋美 (IWATA TOMOMI)

三重県立看護大学・看護学部・看護学科・助手 H23→H24

研究者番号：20609292